

くらしナビ 暮らしスタイル

ワクチン 海外では「3年ごと」



犬や猫の感染症予防に、ワクチン接種は欠かせない。「毎年1回」が常識とされてきたが、「3年以上の間隔で」との考えが海外で浸透しつつある。日本では今も多くの動物病院が毎年の接種を推奨しており、混乱する飼い主が少なくない。

●副作用の恐れ回避

世界小動物獣医師会(WSAVA)は2007年、「科学的根拠に基づき、世界的に適用可能なガイドライン(指針)」を発表した。犬と猫に必ず接種すべき「コアワクチン」を3種類ずつ規定。これらは日本の動物病院で一般的な「3種混合」や「5種混合」ワクチンに含まれている。だが、指針(15年改定版)が推奨する接種方法(図)は、日本での従来の方法と食い違ふ点が多い。特に成犬・成猫の追加接種については副作用のリスクを減らすため

「原則として3年に1度よりも短い間隔で接種すべきではない」としている。

北里大の宝達勉教授(獣医感染症学)は「近年の複数の研究で、コアワクチンによる免疫が少なくとも3年間は持続することが証明されている。日本でも原則3年以上、間隔を空けることが望ましい」と説明する。宝達教授は、全国の大学で使用される獣医

記載がなくなり、現在日本で承認されているワクチンに、この説明はない。過去の説明書が今も毎年接種の根拠になっているとみられる。

●獣医と話し合って

茨城県古河市の栗田動物病院はWSAVAの指針に沿った接種を推奨する。病気に対する免疫の程度を示す「抗体価」を毎年測定し、追加接種の時期をそれぞれの犬猫ごとに決めている。栗田吾郎院長によると、犬の95%以上が3年後も免疫が持続し、7年間持続する犬もいた。

栗田院長は「ワクチンをどう打つべきかは、飼育環境や体質によって異なる」と念を押す。指針でも、屋外と屋内を歩きまわす猫は、室内飼いに比べて病気になるリスクが高いため、コアワクチン3種のうち2種を毎年接種することを推奨している。また、住む地域の感染リスクに応じて接種すべき「ノンコアワクチン」には、免疫持続期間が1年のもも多い。毎年の健康診断で獣医師とよく話し合うことが大切だ。

内科学の教科書でワクチン分野の執筆を担当している。近年の学生は、こうした内容を学んで卒業しているという。

07年の日本小動物獣医師会の調査で、ワクチンを接種した犬は約200頭に1頭の割合で何らかの副作用がみられた。全身に急性アレルギーの症状が出るアナフィラキシーのような重篤な例もあり、約3万頭に1頭が死んでいる。かつて製薬会社は、ワクチンの使用説明書に「1年ごとに接種」と書いていた。農林水産省によると、08年以降は

現実的には、長く慣例となっていた接種方法を転換するのは難しい。欧米を中心に作成された指針に懐疑的な獣医師も一部おり、ドッグランなど、ほとんどのペット関連施設が「毎年の接種」を利用条件としている。栗田院長は「業界全体で共有できる指針を国内でも作る必要がある」と訴える。

犬・猫のコアワクチン

犬ジステンパーウイルス
犬アデノウイルス2型
犬パルボウイルス2型

猫汎白血球減少症ウイルス
猫ヘルペスウイルス1型
猫カリシウイルス

【曹美河】



感染予防にワクチン接種は欠かせない
|| 広島市で、竹内麻子撮影

指針が推奨する接種



※屋外飼育など病気のリスクが高い猫は、猫ヘルペスウイルス1型と猫カリシウイルスの2種を毎年追加接種